

研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 提示系心理情報学に基づくインタラクション基盤確立

2. 研究代表者名及び主たる共同研究者名

研究代表者

寺田 努（神戸大学大学院 工学研究科 教授）

主たる共同研究者

細田 千尋（東北大学 大学院情報科学研究科 准教授）

柳沢 豊（m plus plus（株） 開発部 CTO）

3. 事後評価結果

○評点：

A 優れている

○総合評価コメント：

認知バイアス等の心理効果を活用した効果的なインタラクション技術を基盤とする「提示系心理情報学」の確立をめざし、それらの心理効果に対する受容性はユーザ毎に大きく異なるという受容性極性があることを明らかにした。

認知バイアスを活用したインタフェースには人により受容性の極性があり、効果の度合いの違いや場合によっては想定と逆効果（逆極性）になる場合があるという斬新な仮説を提唱し数事例で検証したことは独自性の高い成果であった。情報提示による介入が人をどうWellbeingにするのか、あるいはどのようなリスクが起こりうるのかを実践的に探求するという目標設定に対して、混雑防止や健康モチベーションの維持、運動練習効果の向上など多くの事例について分析し有用性を示した。また、子の遂行能力（目標達成を可能にする行動の継続）の発達には、親自身の遂行機能の強さが重要であることに加え、親の養育態度として、子供に対して統制的すぎてはいけないことを明らかにした。さらに、ステージエンタテインメント現場でのLED電飾衣装・電飾バナー技術の開発・実用化を通して、電飾技術におけるシステム故障を観客に認知させないデザインのガイドラインを公開した。原著論文116件（うち71件英語論文誌）、73件の招待講演、30件受賞、80件強のメディア報道など、多くの対外発表成果があった。

情報提示による心理的介入に関して、いくつかの有用性の高い顕著な具体的事例を達成しているものの、これらを体系化して説明できる提示系心理情報学の設計論を示すには至らなかった。受容性極性の仮説に基づくスクリーニング技術について、さらなる洗練を期待する。